

加害行為の理解はいつから発達するのか

赤澤美玖

いじめは現代日本の社会問題である。いじめは主に学童期以降の学校に存在すると認識されているが、実際には幼少期に芽生えている可能性がある。また、加害者には楽しさや面白さなどポジティブな感情が存在することも指摘されており、いじめ防止には加害者の動機の理解も不可欠である。本研究は、3～5歳児に継続するといじめになりうる1度限りのいたずらの認識について、加害者の感情理解に焦点を当てて検討した。仮説は以下の3つであった。1つ目は、5歳児は3・4歳児に比べて行為者の意図を理解できる、2つ目は、5歳児は3・4歳児に比べて意地悪に対する認識の整合性を示す、3つ目は、5歳児は3・4歳児に比べてポジティブな表情を選択する人数が増えるというものであった。

参加者は、3～5歳児の77名であった。登場人物が2人分のお菓子を食べてしまうという内容のストーリーを2種類用意し、紙芝居で読み聞かせた。1つは意図あり条件で、もう1人来ることを理解した上でお菓子を全て食べる、もう1つは意図なし条件で、もう1人来ることは知らずにお菓子を食べるものであった。読み聞かせの後に、わざと食べたのか（わざと質問）、意地悪をした人はいるか（意地悪質問）を聞き、さらに加害者・被害者の表情（表情質問）を4枚の絵カードから選択させた。

わざと質問および意地悪質問では正答者と不答者の人数を数え、年齢と条件ごとに正確2項検定を行なったところ、意図あり条件の意地悪質問の3歳児、意図なし条件のわざと質問の4歳児で有意差が見られた（ $p < .01$ ）。表情質問では各表情の絵カードを選択した人数を数え、年齢と条件ごとに χ^2 検定を行なったところ、意図あり条件の加害者の表情の3歳児と5歳児で有意差が見られた（ $p < .01$, $p < .05$ ）。意図あり条件のわざと質問において、3歳児と5歳児が1度限りのいたずらでも意図を認識する可能性が示された。3歳児はおうむ返しへの返答が多く、抑制機能の乏しさなどから質問を肯定した可能性が高いが、5歳児は理由の言語化も明瞭であったことから、意図がある状況での意図を理解できている可能性が示唆された。意地悪質問では、3歳児は意地悪の意図があっても意地悪をした人はいないという回答が多く、加害者の行動をより肯定的に判断するポジティブバイアスを示した。一方、意図なし条件のわざと質問では、3・4歳児は意図がない状況で意図があると認識する可能性が示された。意地悪質問では、どの年齢においても幼児は意地悪をした人がいないと回答していたため、理解ができていたと考えられる。また、両条件において、3歳児以外で笑いを選択した割合は低く、他者の食べ物を他者のものであると知っていて、あるいは知らずに食べてしまったという行為を、楽しいと解釈する幼児はいなかったことがわかった。

今後は、提示するストーリーにいじめの定義の中でも重要である継続性を追加したり、加害者や被害者の心情を明示したりすることで、わざと相手を困らせることが楽しいといういじめ（意地悪）のポジティブな動機の理解がいつ頃から芽生えるのかを明確にする必要がある。